「素人下宿」の「主婦」――正宗白鳥「悪女の囁き」論

田中俊男

一

正宗白鳥に「悪女の囁き」と題する作品がある。大正二年一一月一九日から三年三月八日まで「国民新聞」に連載された中編で、福武書店版『正宗白鳥全集』「解題」[1]によると、「その後の単行本・全集には未収録。本巻においてはじめて収録」されたという無名の作品である。

「悪女の囁き」は下宿小説であり、下宿屋の主人＝「主婦」に焦点が当てられている。下宿と「主婦」と言えば、「浮雲」（明治二〇～二一年）、「魔風恋風」（明治三六年）、「こころ」（大正三年）などが想起されるだろう。三作品の「主婦」はいずれも下宿人の男女関係に介入する。自分の娘の配偶者選択、あるいは知り合いの男の依頼・手引きという形で。浮き彫りになるのは「主婦」の計算と策略である。下宿という明治時代に誕生した、家族とは異なる新たな親密圏における中心点かつ結節点としての「主婦」。彼女は男女関係に関わり、時にそれを主導する人物としてクローズアップされる。「悪女の囁き」もまたこれら一群の下宿―「主婦」小説の一つと言える。

内容に入る前に「悪女の囁き」の地理と作中時間を確認しておこう。

主舞台となるのは東京の旧牛込区天神町[2]の下宿である（以下舞台設定の説明が終わるまで、牛込区と天神町に傍線を引き強調する）。登場人物の立ち寄り先である神楽坂・赤城神社・山吹町・水道町・飯田町・江戸川などの地名は、旧牛込区とそれに近接する地域

に属する。作者の個人史に重ねてみよう。『正宗白鳥全集』「年譜」[3]から白鳥の上京後の住居を、「悪女の囁き」発表後まで整理すると次のようになる。

明治二九年（一七歳）、二月上京し牛込横寺町君塚方に下宿、東京専門学校の専修英語科入学。
明治三〇年、牛込戸塚町平山方に下宿。
明治三一年、英語学部卒業、史学科入学。一〇月頃牛込喜久井町西方寺に住む。
明治三二年、史学科廃止により文学科に転じる。上野図書館によく通う。一〇月頃小石川同心町六内田方に下宿。
明治三四年、文学科卒業、同校出版部に所属。
明治三六年、読売新聞社入社、一〇月頃再び牛込戸塚町一〇平山方に下宿。
明治三七年、九月頃本郷森川町一の九八幸田方に下宿。
明治四〇年、本郷森川町一桜館に下宿。
明治四一年、九月老婢を雇い、本郷東片町に一家を構える。
明治四二年、小石川関口町に住む。
明治四三年、読売新聞社退社、一二月小石川豊川町三七番地に住む。
明治四四年、四月結婚、牛込矢来下天神町七五番地に住む。
大正二年、五月頃牛込矢来町四番地に住む。一一月～翌年一月「悪女の囁き」連載。
大正五年、九月頃麻布我善坊一〇番地に住む。

以上から分かるとおり、白鳥は一家を構える明治四一年九月まで牛込・小石川・本郷に都合十年あまり下宿する。下宿の種類は「桜館」のような一般的な下宿屋、「君塚方」「平山方」「内田方」「幸田方」のような「素人下宿」、「西方寺」のような寺の三つに分かれる（前二者の区別は後述）。「悪女の囁き」主舞台の牛込天神町は、連載開始半年前までの居住地であり、連載時も同じ牛込に暮らしている。すなわち白鳥は、学生時代と作品発表前後に最もなじみだった場所を舞台に選んでいる。

では作中時間はどうか。夏休み中であることは明記されているが、年を直接決定する材料は少ない。二か所あげる。一か所目は冒頭の、学生が古本屋でカーライル「クリチカルエッセー」を手にし、胸を躍らせる場面である。後年の述懐だが、白鳥は「内村鑑三」（昭和二四年）でカーライルの『クリチカルエッセーズ』と題する小論文集」の名をあげ、内村の講演を聴き、その勧めに従って「早速中西屋書店でその論文集中のバーンズ論を購つて熟読した」と書いている。この講演とは内村が明治三一年一月から毎月曜に五回、神田美土代町の基督教青年会館で行ったものである。講演内容は翌年『月曜講演』（警醒社　明治三一年三

月）にまとめられることになるのだが、そこで内村は「カーライルの最も善き所を学ばんと欲せば、『評論集』を読むに如かず」と述べており、合致する。[4] 白鳥は翌三二年一〇月まで牛込に住んでおり、作者の個人史を重視するならば、時代設定は明治三一年以降でそれほど遅くない時期と言える。

二か所目は、「五十を過ぎた老婆」＝「主婦」が、「若い時分大名華族の家で御殿女中をしてゐた」、「お屋敷に奉公してゐた時分に若様に思ひを掛けられた」と説明されているところである。「大名華族」は明治二年以後の用語、「御殿女中」は通常江戸時代の用語である。よって明治と江戸の時代区分が曖昧だが、今＝作中時間に数え年齢で五一歳、明治維新時に一七歳だったとすると、今は明治三〇年代半ばとなる。少し幅をとっても明治三〇年～四〇年あたりとなろう。

この二つのか所と、白鳥自身の学生生活が明治三四年までだったことを考え合わせ、作中時間は明治三〇年代初めから半ば頃までのいずれかの夏休みとしておく。ただしそれ以降も白鳥は下宿に関する新しい情報に接する機会が多かったと思われる。明治三六年から四三年まで「読売新聞」に勤務し、三七～三八年には自ら「文科大学学生々活」[5]という連載を持ち、下宿屋の素描を行っている。取材も経験したたことであろうし、立場上さまざまな情報が耳に入ってきたはずである。また「読売新聞」は明治四〇年～四四年の間、「下宿屋通信」[6]という記事を載せた。このような点を付け加えると、明治三〇年代半ば以降の事項も反映されている可能性がある。よって後で下宿その他の資料をあげるに当たっては、明治三〇年代半ば以降、作品発表時のものまで幅広く扱う。

では、地理と時代を踏まえたうえで作品の内容を見ていこう。「悪女の囁き」は以下のような物語である。

牛込天神町に五〇代の「主婦」、息子・駒吉（養子。中学生ぐらいか）、幼い孫娘が暮らしている。今は夏休み中。「主婦」の夫は登場せず、死別・離縁その他の理由が考えられるが不明である。孫娘の親も登場しない。「主婦」には浦津という未婚の実子があるが、他家に養子に入っている。「主婦」は「素人下宿」を営むことで生計を立てており、下宿人は谷村と廣田（二人は同郷）、そして穂垂の三人の学生である（谷村は夜学）。谷村が「主婦」に誘惑され、関係は谷村が深夜「主婦」のいる茶の間に忍んでいくことで続いている。そのことに気づいた駒吉が荒れる。廣田は浦津に相談し、この家は「解散」した方がいいと言う。谷村が家を出るが、転居先は近所の貸間で、三度の食事は元の家でとる。「主婦」は今度は廣田を誘惑しようとする。谷村は二人の関係に疑念を抱くが、谷村と「主婦」の関係は続く。「主婦」だけが平然として様子の変わらないことに男たちはあきれている。駒吉は家出をして近くに下宿するが、一日で戻ってくる。浦津

の妻にと「主婦」が望む肺病持ちのおいくが現れ、駒吉が関心を持つ。新入りの風間が谷村と「主婦」の関係に気づき、廣田とともに不快を示しながら階下の様子をうかがう場面で終わる。物語はほぼ天神町の家とその周辺の狭い界隈の行き来で進行する。

白鳥は同じ話を以前に小説化している。「他所の恋」（明治四四年二月）[7]がそれで、大人の私が学生時代を回顧するという形式である。下宿の場所は小石川の久堅町。やはり夏休み中の出来事である。「素人下宿」で「主婦（かみさん）」と下宿人の焼津が関係を持ち、「主婦」の孫が憤っている。焼津は近所に移るが、食事に通ってくる。皆の様子が変になっていくが、「主婦（かみさん）一人が以前と変らないでゐる」。まもなく私は宿を移る。

「他所の恋」は短篇で、「悪女の囁き」は中篇である。「他所の恋」は回想する私の外枠があり、「恋」のエピソードが複数存在する。また、「悪女の囁き」は三人称で、複数の人物の内面が語られているが、「他所の恋」は一人称で、一人の見聞と内面しか語られない。「他所の恋」の中の一つの「恋」のエピソードを膨らませ、視点を複数化し、再度小説化したのが「悪女の囁き」である。

再小説化にはどんな意味があったのか。それを明らかにするために、「他所の恋」の同時代評を見よう。「潤いの豊な作」[8]と評価される一方、「云ふに足りない、油の乗らぬ作」[9]、「この人の他の作に比していゝ作とは云はれなかつた」[10]、「失望」[11]、「取立てゝ云ふ程の値打も無い」[12]といったような酷評が目立つ。注目すべきは、語り手私＝木村の傍観者的態度が問題化されていることである。「世故に疎い、冷静か（ママ）、自分一人怜悧ぶつて居る白鳥式の男が描写した事になつて居る」[13]、「主人公の木村がもつと敏感で神経が鋭くあつたら、一層外界の刺戟を強く感じてそれによつて興味を多からしめた」[14]などとある。「見つともない他所の恋は、如何にも他所の恋らしく描けつて居た」[15]という肯定的評価も、おそらく観点は同じである。

実際は同時代評が批判するほどに、木村は傍観者的ではない。たとえば、「夜一夜二階や茶の間が気になつて眠れない。焼津が垣根に忍んでゐるのだと思ふと、尚更心が落着かない。我知らず主婦の寝息をも窺つた。平野の便所に下りて来るのにも胸を騒がせた。夜が更けるほど家の内外が気味が悪くなつた。陰気な部屋に敷ぱなしの蒲団にくるまつてゐる焼津の顔が恐しく胸に浮んだ」と書かれている。だがこの後、「間もなく私は宿を変つて、再び元の静かな心に返つた」とあり、木村の動揺が簡単に解決したかのような印象を与えるのは事実である。

白鳥が私＝木村の傍観者性への批判に答えようとする意図を、明確に持っていたかどうかは不明である。だが「悪女の囁き」の登場人物たちは、木村的な穂垂[16]を含めて混乱に巻き込まれ続け、時には狂気の一歩

手前まできて、ナイフを手にしたり、「打殺(ぶちころ)さうか」と口にしたりする。何より決定的な差異は、「再び元の静かな心に返」るという解決が与えられないことである。結果を見れば、批判は受け入れられている。「空想」（後で詳述）がより深く傍観者を浸食し、「他所の恋」が自分の恋に転化するありさまを、白鳥は同じ題材で描き直したことになる。[17]

二

放置できない問題があり、周囲はみなそれが問題であることを認識し、相談したり忠告したり非常手段に訴えようとしたりする。だが当事者の「主婦」に諫言を行う者は誰もいない。男たちの関係はきしみ、それぞれが表情を曇らせ、嫉妬し、離反したかと思うと、また集いあい和やかに談笑する。谷村と「主婦」の関係は、周囲の優柔不断な男たちの妥協的な介入によって続いていく。自然主義の「無理想、無解決」のモットーに沿うかのように、何も変わらないことが示されて終わる。物理的な距離も心理的な距離もそうである。廣田が当初口にした「解散」は反語である。物語の末尾と冒頭を接続させても支障がない。この家の日常はループする。

家を出た二人、谷村は結局元の家に入り浸るし、駒吉も一日で戻る。よって下宿の成員は減らない。それどころか作品は終盤で新たに二人の登場人物を付け加える。この点にも「他所の恋」との明白な差異がある。おいくは駒吉の「空想」の中で姉的存在でありかつ性的対象となる。浦津や廣田の嫌悪の対象となる。すなわちおいくとは「主婦」の若い分身である。新入りの風間は「主婦」と谷村の関係に激しく憤る。すなわち風間とは出戻り以降おとなしくなった駒吉の分身である。また風間が他の下宿人同様に「主婦」に妄想を抱く可能性も否定できない。先にループすると述べたが、巻き込まれる成員は増える。人間関係の混乱は一層範囲を広げてループする。これが傍観者性の批判に対して白鳥の出した答えである。

ではどのようにして人間関係の混乱を発生させ、継続させるのか。前提として狭い範囲で頻繁に顔を合わせるという親密圏が必須である。ここで重要な役割を果たすのが、家族とは異なる親密圏を作り出す下宿という場である。

白鳥はかつて「下宿屋」という題の文章で、「下宿屋、名からして忌はしいが、名詮自称、何から何まで下等づくめ」と書いた。[18] ところがその場所に白鳥は特別な吸引力を与えた。吸引力とは第一に「恋」である。第二に家族的な「情味」である。

第一の方から考えてみよう。下宿で生じる「恋」とは何だろうか。「恋」は谷村と「主婦」の性的関係に対して、廣田が使った単語である。同時代の言説を参

照する。「更にヒドイのになると大学生でも下宿させてあは能くば行々は娘を学士夫人にでもさせ様と云ふ野心を持つたも者もある」[19]という。同類は小説で描かれる。「悪女の囁き」連載終了直後に連載の始まる夏目漱石「こころ」[20]の「素人下宿」において、先生はこの「野心」を疑う[21]。露骨な方では、「高等下宿になりては、神聖なる恋愛とやらの媒介をなすものありと聞く」[22]、「原来この囮娘も婆と同穴の狐であるから、下宿人が肉体上の関係を結ぶと、鍛へ抜いた凄い腕を振つて甘く操釣り、男を無我夢中に迷はせて除引ならぬことに為る」[23]、「先づ下宿の事故、五人や十人は常に止宿して居る、すると何時の間にか此家へ女学生風をした女が出入する（中略）、そして下宿屋が実は淫売料のいくらかと分取りするのだ」[24]という。

「淫売」はさておき、「恋」の相手は主人側の若い娘だけではない。「此の連中の素人下宿に於ける行為は私の知つてゐるだけでも素人家の女房と姦通したのが三件、娘と関係したのが十数件、淫売婦と同居するに至つたのは幾等あるか知れない」[25]と断言される。徳田秋声「足跡」（明治四三年）のお庄は、主婦が下宿人の部屋に夜遅く入り込んでいるのを目撃する。「甚しきに至れば下宿屋営業人にして夫ある者が亦好んで自ら下宿人と通ずる」[26]のである。谷村と「主婦」の関係はこれらの言説と合致する。というより、白鳥は作品内部にこのような言説自体を取り込んで、「恋」の刺激剤にする。「他所の恋」の焼津は、「自分等の関係に似てる事が新聞や小説に出てると、お主婦に見せる」。谷村もまた「自分の事を××といふ小説に似てるなんて、真面目で」口にする。男にとって「恋」は、他のメディアを参照することで自己確認されるものなのだ。

とはいえ「悪女の囁き」の場合、これらのメディアの発する言説と同一視できない点があることも見落としてはならない。相手は「五十を過ぎた老婆」、「こんな老女」なのである。先に例にあげた同時代言説で女を形容するのに、「老」という文字は使われていない。

なぜ「老婆」なのか。「悪女の囁き」において「恋」が成立する条件は三点である。谷村は「媚びを含んだ主婦の艶めいた顔付や、暴力を籠めた腕を斤けなかつた」。廣田は「主婦のはしたない誘惑に会いながら、潔白な態度で斤けてゐることを傲つたが」、「その目も唇も、彼れの身体に潜んでゐる欲念を揺り動かす力を持つて」いると認める。下宿内の情事に鈍感だった穂垂も、「昨友見た主婦の寝姿は時々思ひ出されて、読書の疲労が慰められ」、「頻りに好奇心が動」く。まず女の積極性と特別な魅力が強調される。次に、そもそも男たちには「彼れの身体に潜んでゐる欲念」がある。それは刺激によって容易に発動してしまうものなのである。こうした作中の説明がいささか観念的であり、「老」に対して不自然に見えるのは確かである。しかし問題は我々にどう見えるかではない。白鳥は「恋」＝

性欲をそのようなものとしてとらえようとしている。そのうえでもう一つの要素を付け加える。

「五十を過ぎた老婆」は谷村のみならず他の二人の「恋」を刺激することにも成功した。そのきっかけは、谷村と主婦の関係を二人が知り、「空想」したことである。キーワードは「空想」である。[27] 男たちはしきりと「空想」するのだ。廣田は、「今根掘り葉堀り谷村に聞いた事を念頭に浮べて主婦の顔を見ると、只の老婆に過ぎないその顔さへ厭に眩しく感ぜられ」るのだし、自分が「若し惑はされてゐたらと、その場合が自から空想され」る。「空想」が自らを他者の物語の中の登場人物に変えていく、というプロセスがある。駒吉も例外ではない。「谷村に侮辱された母の事が、醜い光景のまゝで目に浮んだが、次第にそれがおいくの身の上に及んで、頻りに彼れの身体が刺激され出した。……最早駒吉はおいくを姉としてのみ空想してはゐな」い。他のメディアを参照して自己確認が起こったのとよく似た構造である。小説内現実は常に何かに媒介されている。

内に潜んで刺激を待つ性欲、そして「空想」の働き。これは初期白鳥的人物の特性と見なしてよい。白鳥は性欲と「空想」の底知れなさに畏れを抱き、同時に魅惑されている。「老婆」という設定は、これらの強度を高めている。相手の属性を超えてそれは発動するのだ。

下宿の吸引力に話を戻そう。第二に下宿には家族的な「情味」がある。家族的な「情味」は建前上、性欲を排除しているはずである。だがこの矛盾は問題化されない。白鳥の描く下宿においては、「情味」の延長上に性欲が発生する。

下宿は二つに分類される。大規模な「下宿屋」、そして「悪女の囁き」や「こころ」、国木田独歩「あの時分」（明治三九年）などの「素人下宿」である。下宿の歴史と現状を見よう。

下宿屋は極く歴史の新しいもので、学制が布かれて東京に中等以上の学校が続々出来たので、地方から遊学するものが多くなり、そこで下宿屋と云ふ営業が始まつたのである。今では大概の都市に下宿屋があるが、到底東京のやうな宏大な立派な下宿屋は他に見ることが出来ない。（中略）元来下宿屋は其の始まりが、儲けて金満家にならうなどといふわけではないのであつたが、今では之れで大に利益を得やうと計つて居るやうになつたのである。（中略）自然に大規模の下宿屋と云ふものが出来て来なければならぬのである。（中略）大きな下宿屋は大概金主が之れを建てゝ営業人に貸すと云ふことになつて居る、夫れであるから一戸にして何万円と云ふ金を費した立派な下宿屋が出来る、夫れを一ケ月百円とか弐百円とかで借受けて営業すると云ふのである。[28]

ここに紹介される「下宿屋」の規模はどの程度か。「下宿屋の洗面所には、二三個の金盥――多くとも三四個――を備へあるのみにて、これをば十人、二十人、多きは三四十人以上の下宿人が交る〳〵に使用するものなれば（後略）」[29]とあることから部屋数が知れる。大規模な食事付き宿泊施設である。ここを主人あるいは「主婦」が管理し、一名から数名の女中が食事や掃除の世話を行う。「下宿屋通信」[30]の固有名を見ると、ほとんど「～館」と名づけられている。しかしこれら大規模「下宿屋」には何かが足りない。「情味」は「素人下宿」を価値化するキーワードである。

「下宿屋は市部郡部を通じて弐千余件あるが是等は何れも宿屋営業取締規則（明治廿八年三月庁令第二号）に依る営業者である」のに対し、「是以外に無届で止宿人を置く」のが「素人下宿屋なるもの」である。[31]「下宿屋は騒々敷いとか、飲食物（たべもの）が不味（まず）いとか、情味情趣が無い」[32]、「情味は更に無く、没趣味」[33]。そこで「下宿屋の騒々しきと不親切とに辟易して閑静を希望する所から」[34]、「下宿屋で冷淡な待遇を受けるよりは、家庭の趣味ある素人屋の方が可いとか云つて」[35]宿替えする。「素人屋の特色をいふと、情味のあることである」[36]。「下宿屋」にはない「家庭の趣味」「情味情趣」「情味」が「素人下宿」にはある。これが定型句である。

一戸建て（の主として貸家）に家族が住む。さらにそこに一人から数人が同居して食事をともにし、「情味」のある家族的な関係を結ぶ。もちろんそれは家族的であって家族ではない。関係は短期的で経済的な契約に基づき、メンバーは頻繁に入れ替わる。家族に家族でないものが混じるこの「素人下宿」は近代日本、とりわけ首都に大量に生まれた奇妙な親密圏である。

「主婦」の宿は「食物（たべもの）も悪かないし、宿料も廉い」と優越性が語られる。駒吉が一日だけ宿泊した「下宿屋」が対比される。駒吉は「無愛想な下女」と食事に不満を抱き、「自分の家ほど居心地のいゝ宿はないやうに思はれ出」す。谷村は「玩具屋の二階」と対比する。「食事が済んだらまた自分の部屋へ帰つて、一人悄然（しょんぼり）してゐなければならぬと思ふと詰まらなかつた」し、「寂しい玩具屋の二階に一人でごろくしてゐる自分よりは、此処にゐて落着いて勉強してゐる廣田の方が、どれほど仕合せか知れないと思」う。穂垂は「只の下宿屋は厭だな」と言う。男たちはメディアの言説によりそうように、その吸引力を語るのだが、確かにそれは彼らの団らんぶりに明らかである。

廣田から手紙で深刻な相談を持ちかけられた浦津がやってくると、「皆んなが気軽に晩飯後の雑談に耽つてゐる」。家出をした駒吉が戻ってくると、「母は怒つてゐるどころではない、不断よりも気軽に喋舌つてゐる。あれほど仲の悪かつた谷村と廣田とさへ、睦まじさうにはしやいでゐる」。「情味」はこのように家族

的な団らんを生み出す。

以上、「恋」と「情味」の吸引力を確認してきたが、家の各部屋が同一の価値を持つわけではない。建物の構造を見よう。一階に玄関がある。玄関脇の二畳に駒吉がいる。茶の間と縁側があり、襖を隔ててもう一つ部屋がある。ここを穂垂と谷村が共有する。階段を上がって二階に廣田がいる。注目すべきは一階の茶の間である。ここは食事の場であり、会話とくつろぎの場である。「主婦」と孫娘の寝所であり、谷村が夜忍んでくる。「恋」と「情味」は場所的に合体している。

「駒吉は胸騒ぎをして目を醒ましたが、今夜も茶の間の囁きが意地悪く耳に付いた」。穂垂を含めた「二人の神経が茶の間へ注がれてゐる」。夜中だけではない。駒吉は「茶の間の話声には絶えず聞き耳立てゝゐ」る。風間は「絶えず階下の様子を気にし」、廣田も「階下の物音に耳を留め」る[37]。茶の間は共有される場所である。そこで起こる事件もまた共有される。白鳥描く「素人下宿」の真髄は茶の間にある。

三

茶の間のあるじは「主婦」である。場の無意識的演出者である彼女は、周囲の混乱をよそに平静を保つ存在である。「廣田でも君でも皆んなの様子が変つて来たけれど、お母さんだけは元の通りだからね」。第一章で述べたとおり、「主婦」の変化のなさは、「他所の恋」から一貫する。「疑ひ」に取り付かれて右往左往する男たちを尻目に。重要なのは「主婦」の非当事者性である。当事者でありながら、そのことはほとんど意識されないでいる。彼女は「空想」や「疑い」が発生し増幅するという反応を促進させる触媒としての性質を備えている。白鳥は彼女の当事者意識を描くことは最小限にとどめた[38]。

最小限とは次の二か所である。「主婦は男一匹、此方の仕向け様次第で、鬱いだり悦しがつたりするのを小気味よく感じて、暗闇の中でニツタリ笑」う。人間関係を操ることの自覚が一瞬浮かび上がる。また「主婦」は、「浦津とおいくとの縁談を、今度は自分の働きで首尾よく纏めて見たくな」る。それは自分の生活の安定のためではあるとはいえ、「楽み」なのであり、こちらもまた自覚の一例である。

こうした人物を白鳥的人物と呼ぶこともできる。「白鳥は友人の〈女〉を奪ってそれによって人間関係を混乱させ、現実や他者を動かすことに対する関心を持っていた」と山本芳明は述べる[39]。さらに山本は、白鳥のこの欲望は、レールモントフ「浴泉記」の、主人公ペチョーリンの「他者を操作し支配しようとする欲望」に倣ったのではないか、と推論する[40]。山本は白鳥の「動揺」（明治四三年四月）の男主人公を取り上げ、「関心」や「欲望」のありようを分析してみせ

る。

「動揺」以後の白鳥は自身に近い男主人公よりも、他者を登場させてその「欲望」を代理させているのではないか。それが「主婦」である。たとえば「泥人形」（明治四四年七月）の「主婦」は、男に次々と見合いの斡旋をしようとする。「口入宿」（明治四四年七月）の口入れ屋の「主婦」は男たちに妾の斡旋をする。「まぼろし」（大正三年四月）とその続編「挿話」（大正三年四月）は、待合の「主婦」が女に他の男を斡旋する。これらの「主婦」は新たな人間関係作りに携わり、それを操作する役割を果たす。初期白鳥にとって「主婦」とは、人間関係の混乱・操作・支配への「欲望」の代理人なのである。代理人であるがゆえに自らの当事者性は希薄化されている。

「悪女の囁き」の「主婦」はこれら一群の「主婦」の一人である。では男たちはどうか。一方的に操作される側なのか。実は男たち自身が混乱と騒ぎを期待している点で、「主婦」と同類である。廣田は浦津に「主婦」の乱行を訴えた際、「この男の耳に入れたら直ぐにも一騒ぎあること、待ち設けてゐたのにと歯痒」がる。駒吉は風間の憤る言葉を聞き、「どんな結果になるかと、楽しい待ち設けと気遣はしさとを感じてゐ」る。切断を引き延ばし、「愚図々々煮え切らない」、「男の癖に愚図々々してゐ」て、「何時（いつ）まで煮え切らないことを云」い続ける男たちもまた、実はそうすることでドラマが起こることを待ち望む「欲望」の代理人であり、「主婦」の支援者なのである。

興味深いのは、「悪女の囁き」がこれらの「欲望」を促進する要素ばかりで成り立っているわけではないという点である。白鳥は否定的な場を設定している。それが図書館である。敵対する二人の男・駒吉と谷村は二度同じ行動を取る。一つは転居である。もう一つは一日だけ図書館へ行くことである。図書館は勉強と読書の場所である。「家にゐていろんな事を見たり聞いたりして頭を痛めるよりや、外へ出て知らん顔をして勉強してる方がいゝ」。だがやはり二人とも一日で飽き飽きしてしまう。毎日図書館に通う勤勉な穂垂も駒吉に向かって次のように言う。「谷村も一日きりで止したが、君もさうなのかね。……しかし、僕もこの二三日（んち）は心が落著かなくて変だよ」。「素人下宿」の茶の間は図書館という場に勝利する。図書館には「恋」も「情味」もないからである。結局図書館という否定の場は、肯定を強調するために用いられていると言えよう。

さて天神町の下宿から通えるこの図書館はどこか。

東京市管轄のものとしては明治四一年開館の日比谷図書館、明治四二年開館の牛込簡易図書館や、四三年開館の小石川図書館がある。だがいずれも時代がやや後であり、距離的に近い後の二者は規模が小さすぎる点でも不適当である。

白鳥が在学した東京専門学校（早稲田大学）の図書館は、『早稲田大学図書館紀要』（早稲田大学　明治四〇年一〇月）によれば、「図書館規則第十條」に「公衆閲覧者には若干の手数料を徴して閲覧標を交附す」とある。また、明治三七年一一月六日付け「読売新聞」には、日曜限定で本日から「一般公衆をして同校所蔵の図書を閲覧せしむる」とある。有料で日曜のみ（明治三七年より）。駒吉と谷村が突然思いついて出かける場所としてはふさわしくない。

白鳥は本稿第一章に年譜で示したとおり、明治三二年頃、牛込から上野図書館によく通っている。上野図書館とは通称で、明治三〇年に設立された文部省管轄の帝国図書館（それ以前は東京図書館）を指す。作中の図書館はこの帝国図書館と見なしていいだろう。[41]明治三三年九月四日付け「読売新聞」は、八月の来館者が「八千六百七人にして平均一日凡そ二百九十名の割り」で、貸し出し数は「四万七千二百八十六冊にして一日凡そ一千六百冊」であり、「可なりの盛況」と伝えている。この教養の殿堂たる帝国の図書館を白鳥は「素人下宿」の引き立て役にした。図書館とそこで産出される勉強と読書は、避難所として機能することを求められ、それに失敗する。「悪女の囁き」は学業を本分とする学生の堕落を、茶の間が図書館に勝利する物語として描くのである。

白鳥は学生時代、田舎出身者の学生生活を次のように否定的に語っていた。「実に東京書生の堕落無気力は甚しく、幾多の田舎の潔白の青年、直に此に感染され、慷慨の至りに候」。[42]卒業後は次のように記す。「若し単にこの仮居にのみ一月を送り一年を暮し、主婦が算盤から割り出した献立にのみ飢ゑを凌ぎ、同じ境涯に呻吟せる友人とのみ交り、夏季冬季の休暇も帰省せずして黴臭い図書館などへ出入すれば、五六年の中には、如何に名代の汚点（しみ）抜き薬を使つても、拭ひ取れぬ汚点が生じて来る」。[43]ここで一律に断罪される「仮居」と図書館をあらためて対比的な場所として描き直した点に、白鳥の独創があるとも言えよう。

以上「主婦」と「素人下宿」、そして図書館の組み合わせから成る白鳥の学生物語を同時代言説と重ね合わせながら概観した。地方出身の若者を吸収していった明治・東京における新たな親密圏は、さまざまな人間模様を生み出していく。そしてそれは近代文学の種となる。白鳥は下宿小説の可能性の一例を見せてくれる。

(1)「紅野敏郎　解題」『正宗白鳥全集　第四巻』（福武書店　昭和五九年一一月）。
(2)「下宿屋の巣窟として知られて居る所は本郷神田を第一とし、牛込芝等之に次ぎ」（原田東風編『男女東京遊学案内』大学館　明治三八年三月）の言う所の牛込界隈に当たる。
(3)「中島河太郎編　年譜」『正宗白鳥全集　第三〇巻』（福武書店　昭和六一年一〇月）。
(4)おそらく『Critical and Miscellaneous Essays』という洋書。これ以前に白鳥がカーライルの名をあげた資料としては、明治三〇年九月二七日付け正宗敦夫宛書簡や同年一一月一二日付け正宗敦夫宛書簡がある。また白鳥は「内村全集を読む」で、「興津の夏期学校で氏が一週間続けて説かれた「カーライル研究」は、私をして生れてはじめて外国の文豪の真相を窺はせた」（「読売新聞」大正八年六月八日）とも記している。興津の夏期学校は明治三一年夏に行われた。
(5)「文科大学学生々活」は明治三七年一二月から翌三八年二月まで連載され、単行本『文科大学学生々活』（今古堂　明治三八年一〇月）となった。
(6)「読売新聞」に明治四〇年九月から四四年七月まで三十回掲載された記事。読者から投稿された個々の下宿屋の評価。
(7)「中島河太郎　解題」『正宗白鳥全集　第二巻』（福武書店　昭和五八年六月）によると、その後の単行本・全集には未収録とある。吉田竜也「正宗白鳥と政治―文学者の政治参加と〈大逆〉―」（「早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊11号」　平成一六年三月）は、『孤蝶馬場勝彌氏立候補後援現代文集』（馬場勝彌後援会・編　実業之世界社　大正四年三月）に漱石「私の個人主義」などとともに再録されていることを紹介している。
(8)ＡＩＭ「二月の小説」（「国民新聞」明治四四年二月一六日）。
(9)小宮豊隆「最近の文壇（二月の小説評）」（「新小説」明治四四年三月）。
(10)生田蝶介「二月の雑誌」（「文章世界」明治四四年三月）。
(11)無署名「二月の重なる創作」（「新潮」明治四四年三月）。
(12)槲生「二月の小説」（「学生文藝」明治四四年三月）。
(13)槲生「二月の小説」（前出）。
(14)ＡＩＭ「二月の小説」（前出）。
(15)能成「二月の小説」（「ホトトギス」明治四四年三月）。
(16)傍観者的であり続ける唯一の人物は、「主婦」の実子ながら養子として他家に暮らす浦津である。「他所の恋」の木村が、廣田・穂垂・浦津の三者に分離したという見方もできる。
(17)白鳥は後年「他所の恋」（昭和一四年）という文章

でこの作品を回顧し、「他人の恋を傍観的に描写した短篇」、「甚だ不出来な作品であつたと推察される」、「傍観が傍観になり切つてゐなかつたであらう」などと述べている。

(18)正宗白鳥「読売新聞」明治三七年一二月二日の「十人十色」欄。

(19)「読売新聞」明治四三年一〇月一六日。

(20)「朝日新聞」大正三年四月二〇日から八月一一日。

(21)明治三五年一一月の国木田独歩「酒中日記」では、「素人下宿」を経営する母と未婚の妹が軍人を下宿人にとり、「節操を軍人閣下に献上」する（引用は『明治文学全集66』昭和四九年八月　筑摩書房）。

(22)大町桂月『雑木林　桂月文集』（博文館　明治四〇年六月）。「神聖なる恋愛」は決まり文句で皮肉がこめられている。

(23)岡部学三『だまされぬ策　損害予防』（楽山堂　明治四二年一〇月）。

(24)岩本無縫『東京不正の内幕』（高木書房　明治四〇年三月）。

(25)「読売新聞」明治四四年一一月三〇日。

(26)柳内蝦州『東都と学生』（新声社　明治三四年一〇月）。

(27)山本芳明に、「白鳥の軌跡――「空想ニ煩悶」する青年から「自然主義」作家へ　正宗白鳥ノート2」（「学習院大学文学部研究年報35」　平成元年三月）という論がある。そこで山本は「微光」などの分析を行っている。

(28)石川天涯『東京学』（育成会　明治四二年六月）。

(29)「読売新聞」明治四〇年二月一日。

(30)前出。

(31)「読売新聞」明治四三年一〇月一六日。

(32)永沢信之助編『東京の裏面』（金港堂書籍　明治四二年一二月）。

(33)大町桂月『雑木林　桂月文集』（前出）。

(34)「読売新聞」明治三五年一二月八日。

(35)「朝日新聞」明治四〇年一二月一九日。

(36)永沢信之助編『東京の裏面』（前出）。

(37)前田愛が『都市空間のなかの文学』（筑摩書房　昭和五七年一二月）で述べるように、「日本の二階は、西洋の屋根裏部屋のように孤独な隠れ場所でありながら、一方では階下の世界とも緊密につなぎとめられているのである」。また「『浮雲』の世界には、人物の身振りとむすびついた物音がいたるところに仕掛けられている」が、「悪女の囁き」ではそれがさらに誇張されている。

(38)男女を関係づけて堕落させるという点では、この「主婦」の働きは、冒頭であげた小杉天外「魔風恋風」（「読売新聞」明治三六年二月～九月）で、男の意を受けて女学生を堕落させようと計略をめぐらす下宿の主婦に近い。

(39)山本芳明「ある三角関係の力学――「動揺」と「別れたる妻に送る手紙」をめぐって　正宗白鳥ノート4」(「学習院大学文学部研究年報38」　平成四年三月)。

(40)山本芳明「ある三角関係の力学――「動揺」と「別れたる妻に送る手紙」をめぐって　正宗白鳥ノート4」(前出)。

(41)「他所の恋」の木村が通うのは、「上野の図書館」と明記されている。

(42)明治三一年四月二一日付け正宗敦夫宛書簡。

(43)『文科大学学生々活』の「下宿屋」の項(前出)。

＊正宗白鳥の文章の引用は、『正宗白鳥全集』(福武書店　昭和五八年四月～昭和六一年一〇月)による。引用文のルビは必要と思われるもののみに付した。また、圏点を省略したところもある。旧字は新字にあらためた。

(島根大学教育学部特任教授)